

大腸癌 化学療法の トピックス



国際学会における大腸癌化学療法のトピックス

医長

町田 望

Nozomu MACHIDA

静岡県立静岡がんセンター消化器内科

はじめに

昨年1月21日～1月23日まで米国臨床腫瘍学会 Gastrointestinal Cancers Symposium (ASCO GI 2016)がサンフランシスコで開催されました。消化器癌全体で見ますと、膵臓でevofosfamide (TH-302)とゲムシタビン併用のMAESTRO試験(#193)、胃癌ではT-DM1のGATSBY試験(#05)の発表がありました。両方ともネガティブな結果ではありましたが、発表前から注目されていた試験でした。

大腸癌に関しては、ASCO GI 2015ではFOLFIRI+ラムシルマブによる二次治療のRAISE試験が注目されたわけですが、今回はこういった目玉となる話題がなく、小粒な印象が否めません。毎年のように新しい試験の結果が発表されていた時期もありましたが、今はそれらのエビデンスを詳細に分析、解釈する時期なのかもしれません。そういった意味で、トリフルリジン・チピラシル塩酸塩配合錠 (TFTD)のRECOURSE試験やFOLFOXIRIのSTEAM試験などの結果は臨床に役立つ内容であったと考えています。

現在継続されている試験も多数行われておりますので、今後、また新しい発表が報告されると思われます。

TFTDの第Ⅲ相試験RECOURSE試験の最終生存結果

TFTDのRECOURSE試験からは、最終生存結果として、アップデートされた有効性と安全性が報告されました(#634)。同試験は標準治療抵抗性の切除不能進行・再発大腸癌を対象にTFTD+BSCとプラセボ+BSCが比較されました。

死亡イベント72%時点(2014年1月24日)をカットオフ日としたデータでは、全生存期間(OS)の2群間の差は1.8ヵ月¹⁾、アップデート解析(2014年10月8日)の死亡イベント89%時点では2ヵ月でした。OSハザード比(HR)はそれぞれ0.68, 0.69と、経過観察期間が延びても、TFTDの効果が薄まることはなく持続することが証明され、より信頼性の高いデータになっています。毒性に関しても、経過観察期間がおよそ1ヵ月延びたことで毒性が強くなった、ということはありませんでした。

RECOURSE試験ではさらに年齢別(#638)、地域別(#646)の解析も報告されています。年齢別のサブグループ解析の結果、TFTDの有効性については65歳以上の高齢者群と65歳未満の非高齢者群で差がないことが確認されました。毒性については高齢者群も安全に投与でき、患者さんが体感するような非血液毒性の増加もみられませ

※本稿は2016年5月にASCO GI 2016の発表内容に基づき執筆されました。